

## 法科大学院（大学院法学政治学研究科法曹養成専攻）

School of Law

山下 友信 教授

<http://www.j.u-tokyo.ac.jp/>

### 法科大学院の新しい教育

法科大学院（法学政治学研究科法曹養成専攻）は2004年4月のスタートから2年近くを経て、2006年3月には第1回目の修了生を送り出します。今回は、法科大学院で新たに試みている教育の試み2つを紹介します。

### 法律実務基礎科目

法科大学院で行われている授業で、既存の学部や大学院では見られないのが、一連の法律実務基礎科目です。いずれも優れた裁判官、検事、弁護士、企業法務専門家を実務家教員として迎え、担当してもらっています。

今回は、「法曹倫理」の授業の様子を紹介します。この科目は、在学最終年次である3年次の冬学期の必修科目です。山室恵教授（元東京高裁判事）担当の11月21日の教室の様子をのぞいてみましょう。この日は、前半では、依頼者と弁護士の間で信頼関係が失われた場合に弁護士としてはどのように

行動すべきかという問題が扱われました。たとえば、依頼者が訴訟で虚偽の主張をしたり証拠を偽造していたことが明らかになった場合に、弁護士としては訴訟代理人を辞任してよいか、辞任してよとして後任の弁護士を推薦したり依頼する必要があるか、後任の弁護士に対して依頼者のした行為について告げることは許されるのか、というような問題が設定され、学生との対話をしながら授業が進んでいきます。最後の問題は、後半のテーマである弁護士の守秘義務の問題につながっていきます。弁護士が職務上知り得た依頼者の秘密については当然守秘義務の対象となりますが、正当な理由があれば守秘義務が解除されます。この正当な理由はどのような場合にありと認められるかが、様々な事例を素材としながら議論されていきます。学生はこのような授業を通じて、法曹としての心構えを学ぶとともに、自分で考え、自分の意見をまとめ、さらに他者と議論していく能力を身につけていくことになります。

### サマースクール

法科大学院では国際的に活躍できる法曹を養成することを教育目標の一つに掲げていますが、そのために大きく力を注いでいるのが「サマースクール」です。サマースクールは、外国人を講師として迎え、合宿方式で短期集中的に英語による授業を実施するものです。2回目に当たる今年度は、2005年7月23日から28日まで、レイニア・クラークマン教授（ハーバード大学）ほか5名のアメリカ、ヨーロッパの研究者・実務家を講師に迎え、「会社法の現代的動向」というテーマで開催されました。受講者としては、本法科大学院生53名、若手弁護士や企業法務担当者9名のほか、初めての試みとしてソウル大学で商法を研究している大学院生3名も参加しました。学生にとっては、大変ハードなコースでしたが、世界最高峰の研究者・実務家によるコーポレート・ガバナンスや企業買収に関する最先端の理論と実務に関する講義はきわめて充実したものでした。



「法曹倫理」授業風景



「サマースクール」授業風景

# 生産技術研究所

Institute of Industrial Science

前田 正史 教授 (所長)

<http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/>

大学における研究・教育は、未来への投資です。教育により大きな責任がある学部とともに、未来の価値を担保する存在である大学の研究所には、最先端の学術研究とその研究過程における大学院教育を担う大きな使命があります。生産技術研究所は、工学分野を主とした研究中心の大学院大学の典型として新制大学院設立以来、その責任を果たし、大きな成果を上げてきました。

生産技術研究所は、第二工学部の後継として1949年(昭和24年)に現在の千葉実験所のある千葉市弥生町に設立されました。糸川教授によるロケット研究はここでスタートしたものです。起源が工学部であるため、後に分離した航空宇宙部門をのぞいた幅広い工学分野を研究領域としています。現在でも設立跡地の一部を千葉実験所として活用し、おもに大型試験を行っています。その後、1962年(昭和37年)に移転した六本木キャンパスにおいて、都市型研究所として2001年(平成13年)まで活動してきました。さらに、同年に現在の駒場リサーチキャンパスへ移転して以来、はや5年が経過しています。現在、大学院学生約640名、教授、助教、講師など研究室を主宰する教員110名、そして研究・技術職員160名、事務管理職員60名を擁しています。生産技術研究所は、国立大学の法人化も含めた目まぐるしい変化のなかにおいて、極めて強力な所員とスタッフたちのもと、工学全般の研究・教育活動を行っている、大学に附置された研究所としては国内最大、おそらく世界でも大きな研究所の一つです。これまでの56年の歴史においても素晴らしい研究成果を社会に発信し、卓越した人材を輩出しています。

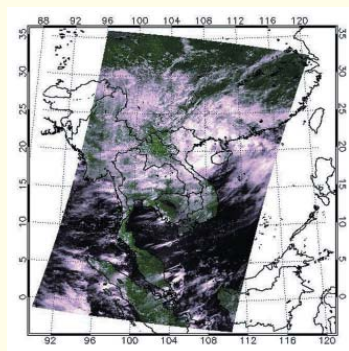
生産技術研究所においては、従来の講座制とは異なり、110名の各教員が、基礎から応用まで広範囲に渡るさまざまな工学分野において、各自の自由な判断によって研究テーマを選び、各自の手法を用いて研究室を主宰することにより研究活動を続けてい

ます。このような研究室制度が創造的な研究を産み出し育て上げるのに重要な役割を果たしています。また、専門分野の近い複数の研究室が自発的に協力しあうグループ研究活動も盛んに行われており、さらには研究成果を拡大・発展させるために、このような研究グループを組織化した研究センターや連携研究センターにおいて、当該分野の総合的な研究を推進しています。現在は、これらのセンターが核となり海外の研究機関と連携し、当該研究の世界的な研究拠点を狙ったグローバル連携研究拠点網の構築事業を推進しています。この事業のなかで、すでにパリとバンコクに拠点が設置されています。

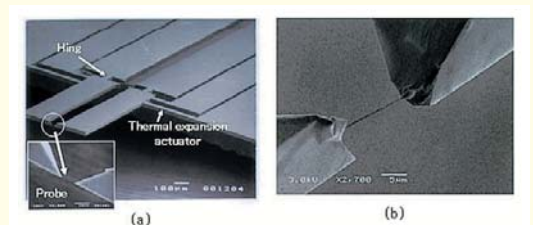
生産技術研究所の教育活動は、大学院教育では、大学院工学系研究科、理学系研究科、および学際情報学府と連携して、600名を超える大学院学生を受け入れると同時に大学院における講義や演習を担当し大学院教育に大きな貢献を果たしています。また、産業界の研究者や技術者に対する再教育にも積極的に取り組み、共同研究や受託研究を通じて80名ほどの第一線の企業研究者や

50名近い博士研究員が、最新の工学・理学についての勉学や研究を行っています。さらには、SNG(Scientists for the Next Generation!!)として、次世代を担う若い人にもっと科学に興味を持ってもらうために、中学・高校生のための東大生研公開、大学院生等による出張授業などのプロジェクトを行っています。この他にも、学部学生や一般の社会人を対象に公開講座として生研イブニングセミナーの実施、産業界の研究者や技術者を対象に生研基礎講座や生研セミナーの実施など、幅広いアウトリーチ活動を長年積極的に行っています。

生産技術研究所は、その名の通り近代産業を基盤とする文明の科学を研究する使命があります。すなわち、わが国として世界にどのような貢献ができるのかという観点から、持続可能な社会のため、工業化の社会基盤によって定義された生産科学の研究をすすめていきます。これにより、優秀な人材を社会に輩出すると同時に、知を創造し価値を創出するための未来への投資という大学の機能を発揮して、生産技術研究所は自らの使命を果たしていきます。



2001年より地球観測衛星TERRAに搭載されたセンサMODISのデータを東京(生産技術研究所)とバンコクにおいて受信し、東アジア、東南アジアのほぼ全域を毎日観測している。これらの画像データを基に、土地被覆分布や生物生産量分布など環境や災害に関する基盤情報を抽出する研究を行い、これらの成果をデータベース化して外部に公開している



先端が10nm級の曲率半径を持つ対向針の間に、誘電力を利用して水中のDNA分子を引き付けるDNA捕獲用ナノピンセットが作製されている。フランス科学研究センター-CNRSを中心とする海外との共同研究を核とし、国内の研究ネットワークと海外のネットワークとの連携により、マイクロ・ナノエレクトロニクスの研究を国際的レベルで推進している